

## 初の海外生産拠点を高雄に建設中の東レフィルム加工

導電性や耐熱性、接着性などの多様な機能を付加した超薄膜のフィルム素材。東レフィルム加工はそうした機能性フィルムの開発・生産を手がける専門メーカーだ。東レグループのフィルム事業の中核会社として、2004年7月に3社・事業（東レの包装用フィルム事業、東レ合成フィルム、東洋メタライジング）が統合して誕生。生産は専ら国内で行ってきたが、2011年5月に初の海外拠点となる現地法人、東麗尖端薄膜を台湾の南部サイエンスパーク高雄基地に設立した。早ければ年内にも、粘着性表面保護フィルム「トレテック」の生産を始める。今回は同社の久保田浩一総経理を訪ね、進出の背景や事業計画について、お話を伺った。



東麗尖端薄膜 総経理 久保田浩一氏

### 台湾事業の進捗状況について

第一期工事は来年(2013年)春の完工予定です。1号機は早ければ年内に操業が始まります。2号機の操業が始まると、年産17,000トンが可能となります。これらのラインの主製品はFPD導光板向けの保護フィルムです。当初計画よりも数ヶ月ほど工期を短縮できそうなのは、色々な申請確認を並行して効率よく進められたことや、客先でのサンプル確認がスムーズに進んだことなどが背景にあります。また、高雄の気候が思いのほか良く、工事の中断がほとんどなかったことも大きいですね。実は、起工式(2011年8月29日)がちょうど台風の上陸と重なったために、当初は少し先行きを心配していました。しかし、後から知ったのですが、台湾には「遇水則発」という言葉があり、こうした式典などで「水に会う」のは却って縁起が良いそうです。今ではこの言葉を、今年の干支にちなんで「祥龍飛躍」という成語と合わせて、社内の標語にしています。

### 現在の事業体制と今後の拡充について

現在は、現地人材を中心に、33名で営業活動と操業開始に向けた準備を進めています。第一期工事を終える来春には、100名体制まで拡充する計画です。この人数でも、生産計画と比べると少なくお感じになるかもしれません。これは、当社のフィルム事業が検査も含めて自動化が進んでおり、それほど人手を必要としないためです。ただその分、質の高いオペレーター人材が欠かせません。まさに今、そうした人材

の採用活動を行っているのですが、大変優秀な方が多い。ものづくりにおける、台湾の人材の厚さ、教育レベルの高さを感じています。

### 台湾進出を決めるまでの経緯について

フィルム事業の海外展開に向けた調査を始めたのは2010年の春ごろでした。当初はトレテックではなく、太陽電池のバックシートや他素材の工場を中国に出す計画でした。中国には東レグループの生産拠点があり、有力な顧客もいますので。しかし、調査を進める中で、次第に中国事業のリスクや安定的に利益を確保することの難しさが明らかになってきました。これが夏ごろの話です。東レフィルム加工にとって初めての海外拠点です。リスクをとるよりも、安定経営が期待でき、かつ、今後の海外事業発展のハブとなりえる場所として、台湾という選択肢もあるのではないかと、という話が出て、並行して台湾の調査がスタートしました。そこからは早かったですね。

台湾では、投資計画の大転換がありました。太陽電池他ではなく、FPDの工程紙、即ち、トレテック生産への転換です。液晶テレビのバックライトはここ数年でCCFL(冷陰極蛍光管)からLEDへのシフトが急速に進んでいます。LEDの場合、細長い光源を面状に導いてくるためのフィルム、つまり導光板が必要となります。トレテックは、この導光板を工程内で運んだり、検査したりする時に傷が付かないように保護するためのシートです。台湾には、奇美集団(CMO)、友達集

日本企業から見た台湾

図(AUO)を始めとする有力な導光板メーカーが集積しており、まとまった量の保護フィルムのニーズがあります。彼らの歓迎と協力が得られたことが、当社の台湾投資計画を力強く後押ししました。

FPDの世界では今、コストダウンが大きな課題となっています。そのためには、バリューチェーン企業同士の密接な協力が欠かせません。台湾に来てから、品質や工程の改善を進めるには、顧客の傍にいた方が圧倒的に効率が良く、ひしひしと感じています。コミュニケーションの質が違うんですね。以前なら、当社が提案を行っても「どれだけ安くなるのか」という反応だったのが、今では「評価作業を早くしましょう」と、顧客から積極的かつ協力的なご提案をいただけるようになってきました。

台湾進出を伝えるプレスリリースでは、ECFA(中台経済協力枠組み協議)にも触れていますね

台湾は、ゆくゆくは輸出の拠点にもなっていく場所です。それだけに、ECFAのアーリーハーベスト(=早期関税引き下げリスト:中国側がリスティングした557品目は、2012年1月の段階で90%以上がゼロ関税となっている)の中に、(トトレックを含む)フィルム類が入っていたことは、当社の意思決定を後押しする要素の一つとなりました。元々6.5%かかっていた関税がカットされるわけですから、顧客にとっては大きなコストダウンとなります。

南部サイエンスパーク(高雄基地)の事業環境について

とても使い勝手が良いと感じています。よく整備されたインフラや様々な租税優遇(\*国内外から購入する機器設備・原料等の営業税免除など)に加え、顧客工場へのアクセスもスムーズです。また、高雄港も良いですね。戦前から続く、台湾を代表する港であるだけあって、各地との物流も便利ですし、通関の効率も良い。台湾での生産にあたっては、当面は主原料を日本から輸入しますし、将来台湾から中国への物流が始まる時のことを考えても、近くにこうした立派な港があるのは、心強く感じます。

台湾拠点の位置付けと事業展望について

フィルム産業をグローバルに見ますと、今、汎用型のベースフィルムの工場が中国からインド、中東へと、広がりつつあります。当社のようなフィルム加工メーカーにとっては、事業機会が世界大に拡大しつつあるわけです。台湾は、当社がこの伸長する「フィルムベルト地域」に沿って成長していく上での起点であり、ハブとなる場所です。

台湾では、当面はFPD事業に注力します。この業界は市況変化および価格変動が激しく、現在は川上から川下まで、どのメーカーも苦しい状況にあります。ただ私は、このまま価格競争が続き、メーカーが自滅する状況になるとは考えておりません。高い利益は出せなくとも、産業として安定成長が続けられるよう、テレビメカやパネルメカによる調整が行われるはずですよ。

とはいえ、台湾事業を長期的に見たとき、FPD一本というのはリスクが大き過ぎます。ある時期からは、他の用途のトトレックや他の種類のフィルムも生産するなど、多角化を進める必要があります。台湾政府が力を入れているエネルギーや環境、バイオといった分野でも、政府や現地企業と連携しながら、事業を作っていければ、と考えています。

そうした長期的な事業発展の土台となるのが、導光板用のトトレックです。これからが本格的な事業立ち上げとなります。台湾の素晴らしい顧客とともに最高のスタートを踏み出せるよう、社員一同尽力してまいります。

ありがとうございました。

東麗尖端薄膜(股)の基本データ

会社名	東麗尖端薄膜股份有限公司
設立	2011年5月
董事長	林楊龍
資本金	12.37 億元
社員数	33名(内日本人3名)
事業内容	ポリオレフィン(PE・PP)系フィルム「トトレック」の製造販売

注)2012年3月時点のデータによる。  
出所 公開資料及びヒアリングよりNR1整理